チーム

東　中　学　校
女子バレーボール部通信
NO、200号
１月１６日(木)

一年生大会を前に…

１－２５

「相手が２年生だったから・・・」という言い訳はいくらでもできます。ましてや秋季愛日地区大会で３位になり、県大会に出場したメンバーです。「負けて当然！」と思ってしまうことが当たり前だと思うかもしれません。しかし、先生は結果ではなく、一年生全員の試合中の気持ち・姿勢・雰囲気にこそ、問題があったと思っています。あきらめたり、弱気になったりした人もいたでしょう。また、仲間が沈んでいることを分かっていながら、声をかけたりチームの士気を高めたりすることができなかった人もいたでしょう。

一年生大会は、本当に何が起こるか分かりません。今の３年生の時は、インフルエンザが流行し、当日までメンバーが決まらないという状況でした。しかし、そんな状況の中でも、１セットマッチとはいえ水野中に勝ちきることができました。（その後、水野中は引退まで１回も瀬戸旭大会・愛日大会で負けていません。）今の２年生は、『愛日大会優勝』という結果を得ましたが、そこにたどり着くまでには、瀬戸旭大会も愛日大会の予選リーグでも１敗ずつして、得失点差や該当校同士の対戦結果によって勝ち上がることができました。

一年生大会こそ、どんな状況でも諦めずに、みんなで戦っていくことが求められます。一年生はもちろん、二年生・家族・顧問、みんなで最後まで諦めずに戦いましょう。

【共通すること】

裏面に、２つの新聞記事を紹介しました。年代・種目・性別など、様々な違いはありますが、根本の部分は同じ・大切にしていることは共通するのではないでしょうか。やはり最後は、

- 真面目に取り組んだ人
- 日々の生活をきちんとやれる人
- 感謝の気持ちを忘れない人

が笑うことができるのですね。

【保護者の皆さんへ】

いよいよ一年生大会も明後日となりました。特に今週は、いい意味で緊張感を保ちながら、質の高い練習ができました。１年生が必死に取り組むことはもちろん、２年生が献身的なサポートで１年生を支えていました。まさにチームが一つになって明日を迎えることができました。

左にも書きましたが、毎年、一年生大会は何が起こるか分かりません。普段の試合以上に、“雰囲気”が大きなウエイトを占めることになります。寒い中ですが、ぜひご都合のつかれる方は会場に足を運んでいただき、一緒に応援できたらと思います。よろしくお願いします。

星城連覇 3冠達成

全員守備を徹底 流れ呼ぶ

男子決勝を制すと、星城の選手たちははばかることなく、うれし泣きした。歴史に残る2年度連続の高校3冠。選手たちは「記録より、この仲間と戦い、バレーを楽しめたことが一番」と口をそろえた。

際だったのは強打ではなく守備力だった。1セット先取して迎えた第2セット。2連続失点で6－4と鹿児島商に追い上げられた。エース石川ら強打を誇る攻撃陣がブロックに遭う中、リベロの川口が2度、右腕1本で相手の強打を拾い、最後はミスを誘った。ここからの3連続得点で突き放し、流れをつかんだ。

「一つめ、二つめのボールタッチがなければ、スパイクもない。レシーブが一番大事だというのを、全員が理解しているからうちは強いんです」。守備職人の3年生はうなずいた。

追われる立場でも抜かりはなかった。紅白戦では石川と逆のチームに、川口ら守備力のある選手が入って対戦。「石川のスパイクに比べると、他校の選手にはそこまで怖さを感じない」と川口が言えば、石川も「ほんの少し甘いだけで、川口に拾われる。あいつのおかげで、さらに上をめざそうと思えた」。日々の練習に加え、昨年末は大学生と強化試合をするなど、常に高みを意識してきた。

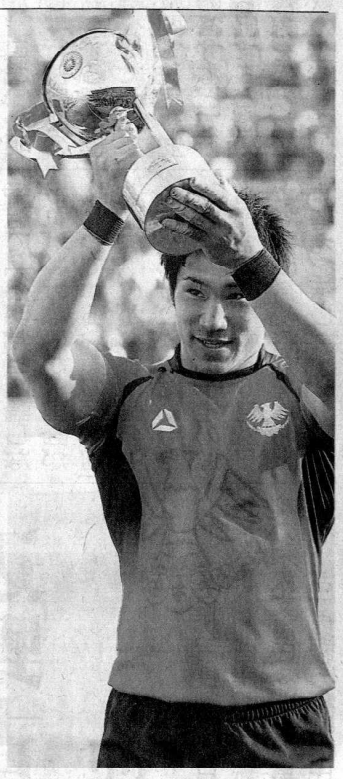
主力選手は大学やプレミアリーグでバレーを続ける。「みんな、まだまだ強くなれる。次は日の丸を背負って戦いたい」と石川。2020年の東京五輪での「再結成」を誓った。

（松沢憲司）

ひと

全国大学ラグビー選手権で5連覇した帝京大の主将

中村（なかむら） 亮土（りょうと） さん(22)



「4年前はチームで一番下手だった」。152人の部員をまとめ、5連覇に導いた主将は努力の天才だった。身長178㌢、体重95㌔の体を武器に突破した。

鹿児島で生まれ、「地に根を張った男に」という願いから名付けられた。「赤ちゃんの時から、太ももだけは太くて、負けず嫌いで」と父の信也さん。郷土の英雄、西郷隆盛にあこがれ、長渕剛さんの歌を愛する。

中学までサッカーに打ち込み、ラグビーファンの父に勧められて、桜島を望む鹿児島実高で楕円（だえん）球を追った。同校の富田昌浩監督いわく「口べたで、背中で引っ張るタイプ。まさに薩摩隼人（さつまはやと）」。

全国大会では1勝もできなかった悔しさを糧に、強豪の帝京大へ進んだ。岩出雅之監督は「強豪でない高校出身の選手は、謙虚に頑張る」。毎日、最後の一人になるまで居残って練習し、体重は4年間で12㌔も増えた。寮の食事当番を4年生が担うことにして、トイレの掃除も進んで励む。「チームの手本になって、下級生を助けたい」。気が優しくて、力持ち。日本代表にも選ばれた。

102歳の曽祖母が「ひ孫の活躍をずっと見たいから、天国にはまだ行けない」とテレビで応援してくれた。「支えてくれた人たちに感謝。うれしいというより、ホッとした」。重圧をはねのけ、仲間たちの手で宙を舞った。

文・木村健一　写真・関田航

どちらも朝日新聞　1月13日